



病院は肺炎を治すところであって 肺炎になるところではない！

第3弾

～ 介護をしている夫の怒り ～

Kさん、77歳は 口から食べものが通らなくなる難病になり、胃ろうを造設。87歳の夫と二人暮らしで、寝たきりの要介護5の妻を介護して8年になる。

痰がうまく自分で出せないの で 吸引をして口の中をキレイにしたり、おむつ交換をしたりと献身的に介護を毎日してきた。胃ろう交換の時期となり、体調を整え、病院で胃ろう交換を行った矢先、「肺炎で退院が延期になった」と、夫に病院から電話が入った。

コロナ感染防止対策のため、病院へ行っても面会できない。いつもなら入院中に夫は毎日病院に行き、口の中をスポンジでキレイにし、痰が絡んでいると看護師に痰の吸引をお願いしていた。今回の入院も夫のレスパイト（介護休息）を含めた、胃ろう交換だけのはずだったのに…。

夫は「公的病院や大学病院には看護師や医師が、町の病院に比べたら多くいるのに、どうして肺炎になるんだ」と、怒りが治まらない。コロナだからと言って、洗濯物を取りに行くことしかできないので、夫は日々不安が募るばかり。更に主治医からも詳しい説明はなく、「もうしばらく かかります」の一言で日々が過ぎている。

どんなことがあっても病院には入院させたくない！

～ やっと退院ができた妻の怒り ～

Aさんは心臓が悪くペースメーカーの埋め込み術を行い、数年になる。定期的に電池交換のため大学病院に入院しているが、無事に電池交換が終わった矢先、誤嚥性肺炎となり、更に酸素チューブや尿の管、点滴などで管だらけになり、点滴の針を抜かないようにと抑制されたり。

しっかりしていた几帳面な夫が訳のわからないことばかり言っている。

延命のために人工呼吸器をつけるかの確認までされ、なぜ突然このような状況になってしまったのか、妻は理解できない。

痰が垂れ込み嚥下機能の低下があるなど、病院ではこうした症状を一色単にまとめ「高齢なので廃用性症候群が進行している」と言われた。

100日間、病院に入院し、発熱のくり返しはあったが、看護小規模多機能型居宅介護『ケアホーム希望』の登録が決まり、やっと退院ができた。「泊まり」のサービス利用をしながら、口から十分に栄養は摂れないが、好きな物を少しずつミキサーでペースト状にして食べれている。

点滴は1日 1,000ml 行っているが、抑制をされることもなく常に職員が近くで見守り、声掛けをしているので笑顔も見られ、安全に過ごせている。

毎日様子を看にくる妻も「お父さんらしさが戻ってきた」と、安心し、ほっとする日々が送れていると言う。高齢者にとって病院は病気が悪化するところなのか…。

悪化した後の介護の大変さを考えてほしいものだ。



中秋の名月

ふと見上げれば
夜空に雲が流れ
雲越しに
雲の隙間に
そして
ゆっくり
姿を現した
光輝く
中秋の名月

夜風に
秋を感じ始めた
中秋の名月

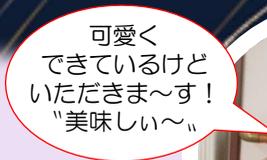
心洗われ
穏やかになる



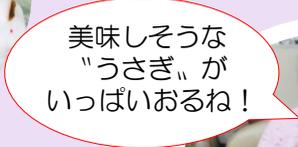
つきみだんご
月見男子



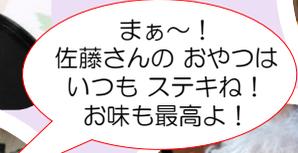
お母さんも
あの月のように
きれいだよ



可愛く
できているけど
いただきます〜す！
"美味しい〜"



美味しそうな
"うさぎ"が
いっぱいあるね！



まあ〜！
佐藤さんのおやつは
いつもステキね！
お味も最高よ！



のぞみ
希望の人たちは
ホント いつも 良く食べ
良く笑っているわね…



食べるの
もったいないから
息子に持って
帰ろうかしら…



社内勉強会開催

コロナ禍で外部研修や勉強会が軒並み中止となりましたが、3密を回避し、ソーシャルディスタンスを守り、社内勉強会を実施しました。

講師は、早稲田大学総合研究所在学中に「地域における看護小規模多機能の役割」をテーマにまとめた研究論文を野村陽一氏に講演してもらいました。



講師：野村 陽一 氏

